



Title	語構成と形状言
Author(s)	蜂矢, 真郷
Citation	語文. 1996, 65, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68886">https://hdl.handle.net/11094/68886</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 語構成と形状言

—

阪倉篤義氏『語構成の研究』<sup>(1)</sup>は、国語の語構成についての研究の中心の課題は「合成」にあるとして考察を進められるが、この「合成」とは、「本来自立の用法を有する二つ以上の単語（または、これに準ずる言語単位）」の「結合」による「複合」と、「本来自立の用法を有する一つの単語に、一つ以上の非自立的要素（いはゆる接辞）」が「接合」する「派生」とを合わせて言うものである。ここに、語構成要素の独立性から見て、合成語すなわち複合語・派生語の構成要素として、(イ)「本来自立の用法を有する単語」、(ロ)「これに準ずる言語単位」、(ハ)「非自立的要素（いはゆる接辞）」という三つの段階が認められ、これを(イ)独立的要素、(ロ)準独立的要素、(ハ)非独立的要素のようにとらえようとする。複合と派生と（ないし複合語と派生語と）の間においては(イ)・(ロ)と(ハ)との差が問題となり、通常(イ)と(ロ)との差を問題にすることはあまりないのであるが、また、(イ)・(ロ)と(ハ)との差の方が(イ)と(ロ)との差より大きいと考えられはするけれども、後にこの節で見るように(イ)と(ロ)との差が問題となる場合があるので、このように見ておくことにする。

合成語を語構成の研究の対象とする場合には、有坂秀世氏<sup>(2)</sup>「国

蜂 矢 真 郷

語にあらはれる一種の母音交替について」・(ロ)「母音交替の法則について」<sup>(3)</sup>の被覆形―露出形の研究が、阪倉氏の研究とともに、手がかりになると考えられる。被覆形―露出形についての概要は周知のこととして今は省略に従うが、有坂氏<sup>(4)</sup>は、「動詞的語根の被覆形」(以下、動詞被覆形と呼ぶ)の用法と「名詞的語根の被覆形」(以下、名詞被覆形と呼ぶ)の用法とが「往々交錯する」とも述べられていて、このことは名詞被覆形と動詞被覆形との共通性を意味している。そして、川端善明氏『活用の研究』I・II<sup>(4)</sup>は、有坂氏の研究を承けて、名詞・動詞の被覆形―露出形の対立を「非独立形」―「独立形」の対立とし、名詞においてもこれを「活用」ととらえられる<sup>(5)</sup>。また、川端氏は、名詞被覆形の用法と動詞被覆形のそれとが「往々交錯する」ことについて、「前動詞・前形容詞的形状言と前名詞的形状言とが、区別されぬ一つのものとして把握される」ことによって、両者を括って「形状言」と呼ばれる。

ところで、川端氏は、右のように名詞・動詞の被覆形―露出形の対立を「非独立形」―「独立形」の対立ととらえられるが、ここに言う「非独立形」は、先に(イ)非独立的要素ととらえた「非自立的要素（いはゆる接辞）」とは異なり、むしろ(ロ)準独立的要素ととらえたものに当たるものであって、被覆形―露出形は(ロ)準独立的要素―

(イ) 独立的要素に対応することになる。先に、(イ)と(ロ)との差が問題になる場合があると述べておいたのが、これである。

右のように、合成語の構成要素として、(イ) 独立的要素、(ロ) 準独立的要素、(ハ) 非独立的要素の三つを考えようとするのであるが、(イ) は名詞・動詞の露出形(すなわち、名詞、動詞連用形)、(ロ) は名詞・動詞の被覆形、(ハ) は接頭辞・接尾辞を、とりあえずその例とする。このように考える時に、(イ) は「本来自立の用法を有する単語」であって自立語としての単語がほぼ該当するが、(ロ)「これに準ずる言語単位」はどのようなものであるかが問題となるであろう。本稿は、この点を中心に考えて行こうとするものである。

## 二

さて、川端氏は、名詞被覆形と動詞被覆形とを括って「形状言」と呼ばれるが、この「形状言」という用語は一般にどのような意味で用いられているのであろうか。

かつては、形容詞(ないし形容詞・形容動詞)の意で用いられていた。例えば、東条義門『山口栞』(天保七「八三三」年)、梅園春男『形状言五種活用図』(元治元「八四四」年)、物集高見『初学日本文典』上下「八六七、大矢透『語格指南』上下「八八〇」二、大槻文彦『広日本文典』「二六三・二」のようなものがある。しかしながら、これは言わば旧称で、現在、このような意味では用いられない。

現代のものとしては、『時代別国語大辞典上代編』に、「形状言」とあるものが一三七項見えるのが注意される。同辞典は、凡例において、「清濁・甲乙までを含めて同語形の場合は、次の文法職能の順に従った」として、

感動詞・はやし詞・名詞・代名詞・数詞・交替形・形状言・構成要素・接頭語・接尾語・助数詞・副詞・擬声語(擬態語)・連体詞・接続詞・動詞(略)・形容詞(略)・助動詞・助詞の順を示している(動詞・形容詞の活用の種類は「略」した)。ここに通常の品詞の他に入っている、はやし詞・交替形・形状言・構成要素・接頭語・接尾語・助数詞・擬声語(擬態語)は、同凡例に別に「品詞欄には示さず、必要に応じて、『訳』ないし『考』に文法的職能を記した」として挙げられているところの、

① 語連接(連語) ② 枕詞・はやし詞 ③ 名詞交替形 ④ 名詞形 ⑤ 補助動詞 ⑥ 交替形 ⑦ 語根・語基などの語構成要素 ⑧ 形状言(形容詞・形容動詞の語幹など) ⑨ 擬声語(擬態語) ⑩ 接頭語・接尾語 ⑪ 助数詞 ⑫ 句 ⑬ 尊敬語 ⑭ 謙譲語(擬声語・擬態語は、まとめて擬声語とした)

のうち、⑥・⑦・⑧・⑨にはほぼ相当する。ここに、「形状言」は、「形容詞・形容動詞の語幹など」とあって、形容詞語幹・形容動詞語幹を中心とすることが示されるが、「など」とあるようにそれらに限られないことも示されている。

以下、同辞典に「形状言」とある一三七項、および、右の⑩に当たると見られる五項のうち「助動詞ゴトシの語幹の独立用法」とあるゴト(如)を除く四項を中心に、見て行くことにしたい。

まず、(1)ク活用形容詞語幹がある。

(1) サ(狭)、コ(濃)、ヨ(吉)/アカ(明・赤)、タカ(高)、ナガ(長)、ワカ(若)、チカ(近)、フカ(深)、アサ(浅)、カマ(驚)、ウマ(味)、ハヤ(早・速)、アラ(荒)、ヨワ(弱)、ヤス(安)、ウス(薄)、フル(古・故)、ナゴ(和)、ニコ(和

・柔、オソ(遅)、ホソ(細)、フト(太)、ナホ(直)、トホ(遠)、シロ(白)、マロ(円・丸)、ヒロ(広)／ウタテ(転)

## 二九項

右のうち、カマ(蠶)は、同辞典にカマシの活用の種類は示されていないが、「アナカマ」(風俗歌・二三)などの例からク活用と見てここに分類したものである。この他、前掲⑧に当たる「クロシの語幹」とあるクロ(黒)を、(I)に加えることにする。

また、この他に、同辞典にク活用形容詞とあるものを語幹の形で挙げると、次のようである。

(I)ウ(厭・倦)、ク、ト(利・鋭・聡)、モ(茂)／クサ(臭)、カタ(堅)、カタ(難)、マタ(全・完)、イタ(痛)、ツダ(怯)、ネタ(嫌)、セバ(迫)、コハ(強)、アマ(甘・甜)、カラ(辛・鹹)、クラ(闇・暗)、ッラ(悪)、ユラ(緩)、ニク(憎・惡)、ミス(驚)、アツ(熱)、アツ(厚・敦)、シブ(渋)、サム(寒・冷)、カユ(癩・癢)、タユ(懈)、カル(軽)、シル(知・灼)、スル(少熱)、ユル(緩・弱)、マソ(雅)、ウト(疎)、サト(聡)、オホ(多)、オモ(重)、キヨ(清)、ツヨ(強・類)、モロ(脆・危)、アラ(青)／トホナガ(遠長)

これら(I)は(I)に加えられる。

## 三

次いで、ナリ活用形容動詞語幹がある。これを、(II)末尾に接尾辞カを持つもの(カ・ヤカ・ラカ型語幹と呼ぶ)<sup>(9)</sup>と(III)その他のものと分けて示す。

(II)サダカ(貞)、ユタカ(豊・寛)、サヤカ(清)、ケヤカ(貴)、

タシカ(礎)、ノヒカ(鄙)、シヅカ(寂然)、ハルカ(遙・遠)、オロカ(愚)／イササカ(聊)、アザヤカ(鮮)、ハナヤカ(華)、サハヤカ(綽)、コマヤカ(茂)、アカラカ(嘩)、ホガラカ(廓)、アザラカ(生)、アキラカ(明)、タヒラカ(平・平安)、ヤスラカ(安)、ツヅラカ(漂青)、ミヤビカ(温雅)、マリリカ(臍)、ユルルカ(寛)、オロツカ(疎)、イコヨカ(岐疑)、イヨヨカ(森然) 二七項

(III)ケ(異)／イカ(如何)、マサ(正)、ヒサ(久)、ヒキ(短・卑)、マメ(忠)、マレ(希)、マト(円)、オホ(凡)／ニヘサ

(甚・多)、アラタ(新)、アラハ(露)、マレラ(希)、オホキ(大)、オダヒ(穩)、マナホ(真直)、ミサラ(風流・雅)／カタクナ(愚癡)、タケナハ(酣)、カリサマ(泛爾)、イタヅラ(徒)、スコシキ(小)、ヒタフル(頓・永)、イヤチコ(灼然)

## 二四項

「形容詞・形容動詞の語幹」に当たる(I)および(II)のものは、合わせて八〇項で、一三七項のうち六割弱に当たる。

右のうち、(III)のヒキ(短・卑)は、形容詞ヒキシ「高からず低からずもたげて」(宇治拾遺物語)の例によるならば(I)に分類することになるが、北原保雄氏の言われるようにク活用形容動詞語幹は末音節がイ列のものがありにくく、形容動詞ヒキナリ(名義抄など)の例もあって、ここに分類しておく。また、同辞典に品詞等が示されていないタダ(直)、タヘ(細・妙)、コト(殊・異・別)も、ナリを伴って形容動詞として用いられるので、(III)に加えることにする。

その他に、同辞典に「ニ」の形で「副詞」とあるもののニを含まない部分が(II)・(III)と同様に与えられるものがあり、次のようである。

(2) ニハカ(急・俄)、ソヒカ(織長)<sup>(13)</sup>、ハツカ(僅)、ワヅカ(僅・纒)、ムセカ(宛然)、ヒソカ(密・窃)、ハロカ(遙)／タマサカ(偶)、ムクサカ、ムツマカ(纏綿)、スミヤカ(急)、ニコヤカ(柔・温)、アサラカ(浅)、ヤハラカ(柔)、ツバラカ(委曲)、ユクラカ、メヅラカ(珍・希見)、ニフフカ、タケソカ、ホルモカ(迅)、ニコヨカ(柔)、モゴヨカ(濩略)、オホロカ(凡)／ツマヒラカ(審・曲)

(3) アヤ(奇)、サラ(更)、カリ(權)、スグ(直)、ツネ(常)／ツブサ(具)、シキリ(類)、マコト(真)／イカサマ(何方・如何)、イマサラ(今更)、コトサラ(故)、サカシラ(賢)、アナガチ(強)／アカラサマ(暴・急須)／モノガナシラ(物悲)また、同じく「名詞」とあるものに、(11)と同様にとらえられるものがあり、次のようである。

(3) ウコ(愚)、ヲコ(愚)／サヲ(青)／マシロ(真白)、カアラ(青)／マダラ(斑)、オギロ(甚大)、カブロ(禿)これら(2)・(3)はそれぞれ(1)・(11)に加えられる。

#### 四

そして、ニを伴って情態副詞として用いられるものがある。これが、さらにアリを伴って約まるとナリ活用形容動詞に現れるので、これらの多くは既に(1)・(11)として挙げているが、形容動詞に現れないものもあるので、そのようであるものを(1)・(11)とは別に(12)として挙げ、これを情態副詞語基と呼んでおく。

(12) セ(狭)／オホ(大) 二項

この他に、同辞典に「ニ」の形で「副詞」とあるもので、情態副詞

として用いられるものは、ニを含まない部分がこれと同様にとらえられる。また、「ト」の形で「副詞」とあるもので、情態副詞として用いられるものも、トを含まない部分がこれと同様にとらえられてよい。これらは例が多いので、いくらかのみを挙げておく。

(3) ユタ、アハ、サヤ(清)、ケヤ、タシ(丁寧)、シジ(繁・密)、シミ(繁)、フツ(臨)、クレ(暗)、ノド(和)、シノ、ソヨ、トヨ(響)、ホロ／フスサ、タユタ、スガラ、ツバラ(委曲)、ウマラ(美)、シミラ、サムラ(寒)、タユラ、モユラ(玲瓏・瑣瑣)、シメラ、タヨラ／ハララ、ヤララ(摺亮)、ツララ、クルル(輻輳然)、トララ／シタタ、シミミ、シノノ、シホホ、ニフフ／モモナガ(股長)<sup>(14)</sup>／タカタカ(高直)、ツダツダ(寸・条然)、ナマナマ(生々)、ウラウラ(遅々)、エラエラ、サワサワ(騒々)、ナホナホ(直々)、ハロハロ(遙遙)／アラタアラタ(新々)、ツバラツバラ(委曲)、ユクラユクラ、モソロモソロ、トララトララ／クレクレ(暗々)

同じく「副詞」とあるウツラウツラ(現々)もともに挙げられよう。また、同じく、ネモコロニ(慇懃)のコロニ、ネモコロゴロニ(動態)のコロゴロニも情態副詞として用いられ、そのコロ・コロゴロもともに挙げられる。

また、同じく「擬態語」とあるものに、ニ・トを伴ってあるいは伴わないで情態副詞として用いられるものがあり、次のようである。

(3) ソ(追馬)／ユラ、ヒシ、ソヨ／ヒビ(鹿鳴)、コゴ(猿声)、コゴ(採音)、トド(叩戸、馬歩)／ハダラ、カワラ、コロク／トドロ(動・動響)／ユララ／トホナガ(遠長)／サヤサヤ、ホラホラ、タシダシ、ビシビシ、サキサキ(騒々)、カクガク(鳥

鳴)、スブスブ、サエサエ(騒々)／コロコロコロ

「擬声語であろう」とあるホドロも同様である。同じく「擬声語」とあるタワタワは、工藤力男氏によってタワワニの誤写と見る方がよいと考えられるが、タワワニは情態副詞として用いられ、また、「未詳」とあるアソソニも情態副詞として用いられ、そのタワワ・アソソもともに挙げられる。これら(3)は(1)に加えられる。

さらに、(1)カ・ヤカ・ラカ型語幹の力を含まない部分で、語構成要素となるものを、(1)として挙げておきたい。これらを、仮に(カ)型語基と呼ぶことにする。

(1)ホノ(髻髻)／アカラ(赤)、アサラ(浅) 三項

前項⑥に当たる「ソゾロカ・ソゾロケシなどの語幹」とあるソゾロは、ソゾロ(漫)とソソロカ・ソソロケシ「波」とが意味も清濁も異なると見られるので、ソソロ(波)として(1)に加えることにする。同辞典に「未詳」とあるサダ(定)も加えられる。また、(1)オダヒ(穩)／(3)マダラ(斑)／(3)ユタ、サヤ(清)、ケヤ、タシ(丁寧)、ノド(和)／ツバラ(委曲)／シタタも同様にとらえられる。同じく「名詞」とあるものに、同様にとらえられるものがあり、

(2)ナゴヤ(和)、ニコヤ(柔)、タヒラ(平処・平地)

のようである。また、(1)シヅカ(寂然)、ハルカ(遙・遼)／イササカ(聊)、ホガラカ(廓)、アキラカ(明)、ヤスラカ(安)、ツヅラカ(漂青)／(2)ニハカ(急・俄)、ヒソカ(密・窃)、ハロカ(遙)／ムツマカ(纏綿)、ヤハラカ(柔)、ユクラカ、メヅラカ(珍・希見)、モゴヨカ(渡略)などの力を含まない部分も同様である。これら(2)は(1)に加えられる。

## 五

この他に多いものとして、(4)下に名詞を伴って複合名詞を構成する用法を持つものがある。先の(1)は基本的に下に名詞を伴って複合名詞を構成する用法を持ち、(1)・(4)も同様の用法を持つものがあるので、(4)は「形容詞・形容動詞の語幹など」の「など」として挙げられるのであらうと考えられる。

(4)マ(真・信)、ユ(畜)、ト(常)／サカ(逆)、マガ(曲・禍)、ムカ(向)、ササ(狭々)、カタ(片)、カタ(頑)、ヒタ(直・頓)、マナ(真名・愛)、ムナ(空)、ナマ(生)、コマ(肥)、ヒラ(平・枚)、ムラ(群)、ニキ(和・柔)、ニヒ(新)、イク(生)、イク(幾)、ハツ(初)、イツ(敵)、ミヅ(瑞)、ウツ(空・虚)、ウツ(全)、ムツ(親・睦、ナメ(滑)、スメ(皇)、シヨ(醜)、トコ(常)、ヨコ(横)、オト(弟)、トヨ(豊)、モロ(諸)／タワヤ(撓)、ササラ(細小)、アタラ(可惜・恠)、アララ(粗)、マスラ(益荒)、スメラ(皇・天皇)、ハビロ(葉広)／ヒバボソ(纖細) 四二項

前掲⑥に当たる「出産に関する意の語構成要素」とあるウブ(産)も、同様の用法を持つので、(4)に加えることにする。(1)アカラ(赤)／(3)マダラ(斑)／(3)ハダラや、(2)と同様のイササカ(聊)のイササ、ヤハラカ(柔)のヤハラや、(4)に加えられたコト(殊・異・別)も同様の用法を持っている。さらに、同辞典に「名詞」とあるものに、(4)と同様の用法を持つものがあり、次のようである。

(4)ツブラ(円)、マホラ(真秀)、ハダレ(薄垂)、ヲソロ(早)また、同辞典に項としては挙げられていないが、十名詞の構成

と見られるタラヤメ(女・婦女)、ウスラビ(薄水)、ヒヒラギ(枉谷樹)、カミルキ・カミルミ、サザレナミ(小浪)、カミロキ・カミロミ、スメロキ(天皇・皇祖)、マホロバ、ヨホロクボ(颯)／ツラツラツバキ(列列椿)などの前項も、ともに挙げられる。これら(4)も(Ⅵ)に加えられる。

(Ⅵ)のうちには、マガ(曲・禍)などのように動詞被覆形に当たって動詞化接尾辞を伴って動詞マガル(曲・枉)などを派生するものや、ムナ(空)などのように形容詞化接尾辞シを伴ってシク活用形容詞ムナシ(空)などを派生するもの(これについては第六節に見る)も見え、ハツ(初)などのようにその他の用法を殆ど持たずば専らこの用法に用いられるものがあり、これは森重氏『日本文法——主語と述語——』(2)の言われる「連体詞」に当たる。

氏は専らこの用法に用いられるものを「連体詞」とされるが、他の用法を持つものも同様の性質を持つものとしてとらえることができる。これらを、仮に連体語基と呼ぶことにする。

ところで、(Ⅵ)のうちいくらかのものは、次のように連体の格助詞ツ・ノ・ガを伴って下の名詞にかかる用法をも持つものである。

ユツマツバキ「葉広斎<sup>はひろや</sup>真椿<sup>まつつばき</sup>由都麻都婆岐」(記仁徳・五七記雄略・一〇〇)、マガツヒ「天乃麻我都比止云神乃言武惡事<sup>たのまゐとひしうんのかたこと</sup>」

(祝詞・御門祭)、ムカツラ「向<sup>むか</sup>つ峰<sup>みね</sup>に<sup>を</sup>」(武朝都烏尔<sup>むけつ</sup>)<sup>\*</sup>立てる夫らが」(皇極紀・一〇八)、シコツオキナ「狂<sup>たふ</sup>れたる醜<sup>みにく</sup>つ翁<sup>おきな</sup>の

へ之許都於吉奈乃<sup>このこほとよけに</sup>」(萬四〇一一)、トコツミカド「常<sup>とこ</sup>つ御門とへ常都御門跡<sup>とこほとよけ</sup>」侍宿<sup>まへど</sup>するかも」(萬一七四)／ミヅノミアラカ

「皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉且<sup>みみもろののみかみのかみ</sup>」(祝詞・六月晦大祓、シコノマサラ「醜<sup>みにく</sup>のますらをへ鬼乃益卜雄<sup>おにのえきふし</sup>」なほ恋ひにけり」

(萬一二七)、トヨノトシ「豊<sup>とよ</sup>の稔<sup>と</sup>へ豊<sup>とよ</sup>之登<sup>ののぼ</sup>る<sup>る</sup>」しるすとならし」(萬三九二五)、ササラノミオビ「帯<sup>おび</sup>はせる細紋<sup>さいもん</sup>の御帯<sup>みおび</sup>の

〈姿佐羅能美於寐能<sup>ささろのみのみよ</sup>〉」(継体紀・九七)／スメラガミカド「皇我朝廷<sup>みかみ</sup>乎常磐<sup>とこ</sup>尔堅磐<sup>かた</sup>尔齋奉<sup>いさほう</sup>」(祝詞・鎮御魂齋戸祭)

これら、連体の格助詞ツ・ノ・ガを伴って下の名詞にかかる全体を、複合名詞に準ずるものとして仮に準複合名詞と呼ぼうと考える。このように、連体語基が複合名詞のみならず準複合名詞を構成することがあることからすると、

(Ⅶ)アキ(現・明)、ウヅ(貴・珍) 二項

は、複合名詞を構成する用法を持たないようであるけれども、

アキツカミ「現<sup>いま</sup>つ神<sup>かみ</sup>へ明津神<sup>あきつ</sup>我<sup>われ</sup>が大君<sup>おほきみ</sup>の」(萬一〇五〇)／ウツノミテ「天皇朕<sup>みかみ</sup>珍<sup>うつく</sup>のみ手<sup>て</sup>もちへ宇頭乃御手<sup>うづかみ</sup>以<sup>もつ</sup>」(萬九七三)

のように連体の格助詞を伴って準複合名詞を構成する用法を持つので、(Ⅶ)に準ずるととらえてよい。(Ⅰ)アサラ(浅)／(2)ナゴヤ(和)、

ニコヤ(柔)も同様の用法を持っている。(Ⅶ)を仮に連体語基と呼ぶのに対して、(Ⅶ)を仮に準連体語基と呼ぶことにしたい。また、

(4)フハヤ／タナガ(長)

も、同辞典に、前者は「名詞」とあり、後者は品詞等が示されていないが、フハヤガシタ「ふはやが下<sup>した</sup>にへ布波夜賀斯多尔<sup>ふなやがすた</sup>」(記神代・五)／タナガノミヨ「田長能御世止奉福尔依且<sup>たながのみのよ</sup>」(祝詞・大庭祭)のように、同様の用法を持つので、(Ⅶ)に加えられる。

さらに、この他に、(Ⅶ)下に動詞・形容詞を伴って複合動詞・複合形容詞を構成する用法を持つものがある。

(Ⅶ)フサ(総・掾)、ウタ、タナ、シバ(教)、イヤ(弥)、イチ

六項

前掲⑧に当たる「自分自身・単独の意を表わす語構成要素」とあるコロ(自)も、これらと同様の用法を持つので、(V)に加えることにする。また、(I)ホノ(髣髴)／(V)カタ(片)や、(2)に加えられるサダ(定)も、同様の用法を持っている。同辞典に「副詞」とある(5)ヤ(弥)／タダ(直・正・但)も、同様にとらえられ、また、トノグモルのトノもともに挙げられる。これら(5)は(V)に加えられる。

これらは、下の動詞・形容詞に対して副詞(時空数量)的にかかるとある。すなわち、フサ(総・採)は数量の大きいさま、コロ(自)は数量が一であるさま、ウタ、ヤ(弥)、イヤ(弥)、イチは程度の大きいさま、ホノ(髣髴)は程度の小さいさま、シバ(數)は頻度の大きいさま、タナ、トノは空間が全体的であるさま、タダ(直・正・但)、カタ(片)は時間・空間等が限定的であるさま、サダ(定)は時間・空間が固定的であるさまを表すかと見られる。よって、これらを副詞的語基と呼んでおくことにしたい。

## 六

先に、ク活用形容詞語幹のものは(1)として挙げたが、シク活用の場合はどうであろうか。この場合は、語幹をどの部分とするかによって事情が変わってくるが、形容詞語幹の用法についてク活用の場合とシク活用の場合とを比べて見ると、例えば、下に名詞を伴い複合名詞を構成する際にはアラヤマ(青山)・クハシメ(妙女)のようであり、接尾辞サ・ラ・ミなどを伴う際にはウマラ(美)・サカシラ(賢・情進・情出)のようであって、形容詞語幹はク活用ではアラ・ウマ、シク活用ではクハシ・サカシとして、シク活用形容詞

語幹はシを含む部分と考えるのがよいと思われる。

ク活用形容詞において、語幹は(準)独立的要素、活用語尾を伴うものは(1)独立的要素と見られるが、このシを含むところのシク活用形容詞語幹は、その点においてシク活用形容詞終止形と同一形態であって、少なくとも形態上からは(1)独立的要素ととらえるべきであろうと考えられる。ところが、シク活用形容詞におけるシを含まない部分は、その全てではないが語構成要素となるものがあるので、これを(1)として挙げ、シク活用形容詞語基と呼んでおく。

### (1)ウツ(頭) 一項

また、これまでに挙げたもので、(I)オロカ(愚)／(II)ケ(異)／マサ(正)、ヒサ(久)／アラタ(新)、オダヒ(穩)／(III)ムナ(空)、ナマ(生)、ニヒ(新)／アタラ(可惜・慍)や、(2)ニハカ(急・俄)／ムツマカ(纏綿)、メツラカ(珍・希見)の力を含まない部分や、(2)に加えられるサダ(定)も、同様にとらえられる。

右の(1)のものの他に、同辞典にシク活用形容詞とあるものにシを含まない部分が語構成要素となるものがあり、

(1)サカ(賢)、イカ(蔽)、ホカ(他)、タダ(正)、マダ(未)、タハ(靡靡)、アヤ(恠・靈異)、ナグ(和)、ハゲ(烈)、ヒト(等)／イフカ(不審)、コキダ、イタハ(勞)／ナガナガ(長永)、スガスガ(清清)、キラキラ(端正)

などのようである。これら(1)は(1)に加えられる。

## 七

さて、これまでに挙げてきたもののうち、重複語の構成要素(以下、これを重複素と呼ぶ)ともとらえられるものがあり、



(I)サ(狭)／アカ(明・赤)、タカ(高)、ナガ(長)、ワカ(若)、

チカ(近)、カマ(簾)、ハヤ(早・速)、アラ(荒)、フル(古

・故)、ナホ(直)、トホ(遠)、シロ(白)、ヒロ(広)／(1)セ

バ(迫)、コハ(強)、ユラ(緩)、シブ(渋)、カル(軽)、ユ

ル(緩・弱)、ウト(疎)、オモ(重)、ツヨ(強・頑)

(I')\*ウツ(頭)

(II)ホノ(髣髴)

(2)／ホガラ(廓)／ハロ(遙)

(II)\*ヒサ(久)、マメ(忠)、マレ(希)、\*オホ(凡)／アラタ(新)

／(3)サラ(更)／マコト(真)

(3)タシ(丁寧)、\*シミ(繁)、クレ(暗)、ノド(和)、\*シノ、ソ

ヨ、ホロ／ツバラ(委曲)／トヲヲ／\*ユラ、ソヨ／トドロ(動

・動響)／ホドロ

(IV)ユ(斎)／マガ(曲・禍)、ナマ(生)、ヒラ(平・枚)、ムラ

(群)、\*イツ(蔽)、モロ(諸)

(V)フサ(総・掾)、\*ウタ、シバ(数)／(5)ヤ(弥)

などのようである。これらを改めて(V)として見ることにすると、こ

れまでには挙げているヤハ(柔)「一項」もここに分類される。

これで、一三七項は全て挙げたことになる。

さらに、同辞典に「名詞」とあるものに、(V)と同様にとらえられ

るものがあり、次のようであって、この(6)は(V)に加えられる。

(6)ツラ(列)

また、同辞典に項としては挙げられていないが、カカ(鳥鳴、呑

音)、ヒビ(鹿鳴)、ツツ(喚鶏)、ココ(猿声)、ココ(採音)、コ

ゴシ(凝)、トド(叩戸、馬歩)／スガスガシ(清澄)、ソガソガシ

(清々)、ヲサヲサ、クダクダシ(細碎)、ツダツダニ(寸・条然)、

サヤサヤ、キラキラシ(端正)、ウラウラニ(遅々)、ツラツラニ

(熟)、エラエラニ、ホラホラ、サワサワニ(騒々)、タシダシ、ビ

シビシ、サキサキ(騒々)、カクガク(鳥鳴)、スクスクト、ユクユ

クト、タツタツシ、ハツハツ(小端・端端)・ハツハツニ、スプス

ブ、サエサエ(騒々)、ホトホト(殆)・ホトホトシクニ(殆)／ユ

クラユクラニ、ウツラウツラ(現々)、モソロモソロニ、オドロオ

ドロシ(驚々)、コラロコラロなどの重複素も、これに加えられる。

さらに、ネモコロゴロニ(動懇)のコロや、アララ(粗)の\*アラ、

ハララニの\*ハラ、ヤララニ(摻亮)の\*ヤラ、クルルニ(輻輳然)

の\*クル、イヨヨ(弥)の\*イヨも同様である。

なお、\*印を付しておいたものは、縮重複・一部重複の重複素と

とらえられるものであり、また、ツラ(列)は一部重複の重複素で

もある。この他にも縮重複・一部重複の重複素としてここに加え得

るものがあるが、省略することにする。

重複語は、ここに挙げた(V)のようなものを重複素とするもののみ

ではなく、名詞を重複素とするもの、動詞連用形を重複素とするも

のなどがある。(3)名詞、動詞連用形は(イ)独立的要素と見られるのに対

して(V)は(ロ)準独立的要素と見られるので、結局、(V)は準独立的重複

素ということになる。

ここで問題となるのは、動詞終止形を重複素とするもののあるこ

とである。動詞が語構成要素となる場合に、被覆形を別にすれば、

基本的には連用形と終止形とがある。その連用形は露出形であって

(イ)独立的要素と見られるが、終止形を(イ)独立的要素と見るか(ロ)準独

立的要素と見るか、すなわち露出形的に見るか被覆形的に見るかは

意見の分かれるところで、文を終止するという機能から見れば露出形的に、ラ変を除いて末音節がウ列であるという形態から見れば被覆形的に見ることになる。動詞終止形の重複が動詞としての機能を持ち文を終止する用法のものは、より露出形的であり、連用修飾的位置に立つものは、より被覆形的であると言える。そのように考えれば、動詞終止形の重複が動詞性を失い副詞化して行くことは、それが動詞性が顕在的な動詞露出形の重複ではなくその潜在的な同被覆形の重複であることから説明できることになろうかと思われる。

## 八

以上、『時代別国語大辞典上代編』に「形状言」とある一三七項、および、前掲⑥に当たると見られる五項のうち四項を中心に、(I)ク活用形容詞語幹、(II)・(III)ナリ活用形容詞語幹の他に、(I)シク活用形容詞語幹、(II)・(カ)型語基、(III)情態副詞語基、(IV)連体語基、(V)準連体語基、(VI)副詞の語基、(VII)準独立的重複素を、「形状言」ととらえることがあることについて見てきた。また、先に見たように、川端氏は名詞・動詞の被覆形を「形状言」と呼ばれた(これを(VI)とする)。(I)・(II)・(I)・(IV)を含む「以下、同様」と(VI)についてともにとらえられるものも見えるが、一々述べるのは省略することにする。これら(I)・(VII)・(VI)に共通することは、準独立―独立の対立としてとらえられる(準独立的要素と見られることであると考えられる。この準独立的要素に対する独立的なものとしては、(I)・(I)に対するク活用・シク活用形容詞、(II)・(II)に対するナリ活用形容詞、(III)に対する情態副詞、(VI)に対する複合名詞、(VII)に対する準複合名詞、(IV)に対する複合動詞・複合形容詞、(VII)に対する重複語、(VI)に対する

名詞・動詞の露出形が挙げられるが、(II)については若干問題がある。若干の問題とは、(II)に対するカ・ヤカ・ラカ型語幹が、(準独立的要素であって独立的でないことである。しかしながら、カ・ヤカ・ラカ型語幹と末尾に接尾辞ク・グを持つク・グ型動詞とが多く対応する(例、タヒラカータヒラグ)ことを考えると、ク・グ型動詞においてその動詞は(II)に対して独立的であるので、(II)はク・グ型動詞を介してカ・ヤカ・ラカ型語幹と準独立―独立の対立を成していることとらえることが可能である。従って、(II)もここに加えられる。

ここに、これら準独立―独立の対立ととらえられる(準独立的要素を、改めて形状言と呼ぶことにしたいと考える。なお、以前に、形状言を「独立・非独立の対立としてとらえられる非独立的構成要素」として述べたことがあるが、川端氏の述べられるところを考慮して「非独立」としたものを、改めて「準独立」としてとらえたいと考える。そして、ここに改めて形状言と呼んだものは、(準独立的要素の主なものであると言うことができる。いや、むしろ、恐らくは(準独立的要素そのものであると言うべきであろう。仮に、(I)・(VII)の他に(準独立的要素があるとしても、それはやはり、何らかの形で準独立―独立の対立としてとらえられるものであらうと考えられるからである。(一九九五・八・二六)

## 注

- (1) [1966-5 角川書店]
- (2) 『国語音韻史の研究』[1944-7 明世堂書店、1967-10 増補新版 三省堂]、もと『音声の研究』4 [1931-12]
- (3) 同書、もと『音声学協会会報』34 [1934-9]
- (4) I [1978-3 大修館書店] 序説 II [1979-2 同] 第二部第一～四章

(5) 森重敏氏『日本文法通論』[1939.1 風間書房] 第三章第一節は、これに先だって、名詞の被覆形・露出形の対立を「名詞の活用」ととらえられる。

(6) 「形状言か」とある一項を含む(以下、同様。注(21)参照。

(7) コログシ・メグシ(慾)のクシの語幹である。

(8) 別稿(『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿(一))〔萬葉〕

112 [1983.1] 参照(以下、同様)。

(9) 別稿(『ヤカ型語幹の構成』)「こ」とのことのは 8 [1991.12] 参照。

(10) 「形容詞のウ音便——その分布から成立の過程をさぐる——」〔国語国文〕36—8 [1957.8]・(一)「形容詞『ヒキシ』致——形容

動詞『ヒキナリ』の確認——」〔同〕37—5 [1968.5]・(二)「形容詞の語音構造」〔中田博士国語学論集〕[1979.2 勉誠社]

(11) 品詞および「文法的機能」が示されていないことを、品詞等が示されていないと表しておく(以下、同様)。

(12) 別稿(『時代別国語大辞典上代編』語末索引稿(四))〔萬葉〕

119 [1984.10] 参照(以下、同様)。

(13) 同辞典に従ったが、ソビカとするのがよいと考えられる。別稿四

「カ・ク・グ」〔国語語彙史の研究〕14 [1984.8 和泉書院] 参照

(14) 同辞典は「いつまでも長く」として、モモ〔百〕+ナガ〔長〕のようにとらえているかと思われるが、土橋寛氏『古代歌謡全注釈古事記編』[1978.1 角川書店] などに従い、モモ〔股〕+ナガ〔長〕ととらえておく。

(15) 同じく「擬声語」とあるキダギダ(寸)は、名詞キダ(分・段)の重複ととらえる方がよいと考えるので、ここには挙げなかった。

(16) 同辞典には、「擬声語」ソヨと「副詞」ソヨニとの両項がある。

(17) 同辞典には、ク活用形容詞トホナガシ(遠長)と「副詞」トホナガニ(遠長)との両項がある。

(18) 「古代日本語における疊語の変遷——イトドからイトイトへ——」〔萬葉〕112 [1985.8]。なお、工藤氏の論については、別稿(『縮

重複——一部重複統考——合わせて工藤氏に対して述べる——)〔同〕117 [1986.7] 参照。

(19) 別稿(『重複形状言・重複接尾形状言』)〔帝塚山学院大学日本文

学研究〕15 [1984.2] 参照。

(20) (1)ミヤビカ(温雅)の力を含まない部分である「ミヤビ(風雅・閑雅)は同辞典に「名詞」とあり、また、別稿(『十カの一形態——語基末がイ列・エ列の場合——)〔叙説〕16 [1986.10]に見

たようにミヤビカは動詞連用形+カの構成ととらえられて、ミヤビは(1)独立的要素と見られるので、ここには挙げなかった。

(21) 同辞典に「形状言か」とあるものである。

(22) 同辞典に従ったが、カモロキ・カモロミとするのがよいかと考えられる。

(23) [1969.6 武蔵野書院]「文法の立場」の章の「形態論の体系としての文法」の節の「連体詞」の項。

(24) 同辞典には、品詞等が示されていないタダ(直)と「副詞」タダ(直・正・但)との両項がある。

(25) 別稿(『語の文法的構成——聲語について——)〔萬葉〕86 [1974.12]に「時間・空間・数量を表わす副詞」としたもの、別稿(『副詞(時間・空間・数量)』)としたもの、参照。

(26) アラヤマ「青山に」阿遠夜麻迹」(記神代二)・クハシメ「妙し女を」久波志實遠」(同)

(27) ウマラ「甘らに」宇麻良介」(記応神・四八)・サカシラ「賢しらす」と「賢良乎為跡」(萬三四四)

(28) すすと、ク活用形容詞におけるジを含まない部分すなわち語幹も、ク活用形容詞語基と呼ばれることになる。

(29) 同辞典はスガシ(清)をシク活用形容詞とするが、用例は語幹の用法のスガシメ「清女」のみで、シク活用に活用した例は、鈴木丹士郎氏「近代短歌における和語の再生」(『日本語学』8—10 [1983.10]の指摘される「浅みどり眼に山川はおぼろなれど其處にすかしき水おときこゆ」(中村憲吉「しがらみ」[1924.7 岩波書店]、大正七[1918]年作)まで下るようであるので、(1)にはスガ(清)を挙げなかった。

(30) 別稿(『一部重複と縮重複』)〔論集 日本文学・日本語〕1 上代 [1978.3 角川書店]・別稿(『など参照。]

(31) 別稿(『など参照。

(32) 橋本四郎氏「動詞の重複形」〔橋本四郎論文集「国語学編」[1986

・「角川書店」もと「国語国文」28—8〔1959・8〕など、別稿(中)  
「動詞の重複とツツ」『国語語彙史の研究』5〔1984・5 和泉書院〕  
参照。

(33) 別稿四参照。

(34) 阪倉氏前掲書第二篇第三章第一節、別稿(中)「カ・ク・ケシ」〔叙  
説〕14〔1984・10〕・別稿四参照。

(35) 別稿(中)「形状言の重複の「形態」〔親和国文〕10〔1976・2〕・別  
稿(中)

キーワード：準独立的要素 形状言 形容詞・形容動詞の語幹

準独立的重複素 名詞・動詞の被覆形

—— 本学助教授 ——